

「庶民的ナラティブ」の文体

—介護老人保健施設入所者の事例より—

寺西 雅之・内田 勇人

0. はじめに

本研究は、文学テキストが主な分析対象とされている文体論・物語論の手法を「非文学」分野のナラティブ分析に援用し、その形式的特徴と効果を明らかにすることを目的とする。兵庫県立大学環境人間学部に所属する5人の教員による研究グループ「医療・心理・教育におけるナラティブ・データの汎用性の検証と分析手法の確立」（平成25-27年度 挑戦的萌芽研究 代表者：奥田恭士（フランス文学・物語論）、研究分担者：内田勇人（健康科学）、井上靖子（臨床心理学）、糟屋美千子（ディスコース分析）、寺西雅之（文体論））はこれまで「ナラティブ」をキーワードとしそれぞれの専門分野を活かした学際的な研究を進めてきたが、本発表では特に内田が介護老人保健施設で収集したナラティブ・データを寺西が文体論的視点から分析を加えて考察した部分について論じた。

1. 研究背景

日本の要介護者・要支援者は平成24年度末時点で545.7万人に達しており、介護ケアサービスの拡充・充実、介護予防、要介護度の重度化予防、疾病・合併症の発症予防は喫緊の課題となっている。中でも忘れてはならないのが、要介護者・要支援者への精神的要素のケアである。外界と意思疎通する意志・機会の喪失により、認知症等の症状を持つ高齢者が社会との「つながり感」を失ってしまい、その結果疾病がさらに進行してしまうというケースは少なくない。そのような状況の中で注目されているのがライフレビュー（回想法）である。

ライフレビューとは、要介護者の精神的な要素に働きかける手法の一つで、人生の歴史や思い出を聴き手が共感的に聴き、相互作用を通じて高齢者自身が自己を洞察していく方法である。これは1963年に米国の精神科医Butlerによって提唱されたもので、高齢者が過去を振り返るという行為が「現実逃避」であるなど当時は概ね否定的に捉えられていたことを考えれば、Butlerの先見性は特筆に価する（内田2016）。ライフレビューの介入効果としては、情緒の安定、問題行動の軽減、うつ傾向の軽減、対人関係の改善などが挙げられるが、最近では特に認知症の進行の抑制に対する効果が期待され、注目されている。この点に関しては、(1)繰り返し安心して語れる場を保障し、曖昧になった記憶や見当識の認識を促し、環境との「基本的つながり感」を補う、(2)過去の一隅を照らされ、生き抜いてきた人生の意味を模索することで、失われた自己効力感・自尊感情を取り戻す（扇澤他2014）、といった具体的な指摘もある。

本研究においてライフレビューを実施し、その語りを敢えて録音して収集した点に関しては、健康科学、そして文体論という2つの観点に基づく理由・経緯がある。前者に関しては、介護予防、要介護度の重度化予防、疾病予防、認知症発症予防を目的としてライフレビューを応用する試みは数多いが、要介護者・認知症者は年々増加・多様化しており、ライフレビューそのものの効用にも個人差が生じている点が挙げられる。したがって、事例研究の積み重ねが不可欠であり、内田は介護老人保健施設にてライフレビュー介入を継続している。一方の文体論の立場からは、医療・介護・健康教育分野ではライフレビュー介入の「治療的効果」のみが注目されており、ライフレビュー（ナラティブ）そのものの内容・文体には焦点が当てられてこなかったという問題が指摘できる。以上の両分野の現状を踏まえて、本研究では、高齢者による回想ナラティブと認知症の進行度の相関性に着目し、2人の介護老人保健施設入所者の語りを録音し、その語り方と文体を分析・考察した。なお本研究は、両研究者が所属する研究機関の研究倫理委員会において承認され、また調査を実施した介護老人保健施設の研究協力者の許可も得られていることを付記しておく。

2. 分析手法

収集されたテキストは文体論の手法を援用して分析した。斎藤（2000）によると、文体には、(1)装飾、(2)個人の言葉の癖、(3)選択、(4)逸脱、(5)一貫性（例：「詩」の文体）、(6)共示性（＝シンボル）という6つの考え方がありとされる。本研究でまず明らかにすべきは、(2)と考えられる。但し、「村上春樹の文体」といった一流作家の一連の作品の特徴ではなく、「素人」である語り手が、時には無意識に用いるような「言葉の癖」を明らかにすることが中心となる。また、本研究で対象となっているのは、洗練された「文学ナラティブ」の対極としての「庶民的ナラティブ」であり、そのジャンルの文体的特徴（すなわち(5)）を明らかにすることが、最終的な目的である。分析テキストが極めて限られているため現段階では一般化はできないが、本研究は庶民的ナラティブ

の中でも「介護老人保健施設入所者」の語りの特徴を明らかにするための第一歩とも捉えられる。

残りの(1)、(3)、(4)、(6)は、テキストのどういう特徴に注目するかという問題である。(1)は、効果的なコミュニケーションのための、あるいは逆にコミュニケーションにとって必要以上の言い回しであり、例えばプリンターマニュアルのような実用的ではあるが「透明無地」な文体とは対照的な「飾り」の言葉を指す。(3)は、語り手が、伝達内容を効果的に伝えるために可能な選択肢の中からどの文法・語彙を選択するかという問題であり、(4)は「標準」とは異なる言葉・用法である。(6)は言葉の持つ象徴性(例：バラ＝情熱)である。また(1)、(3)、(4)、(6)は、後述する創造性(Creativity)やEvaluationの技法とも関連する点でも重要である。

創造性と文体とは極めて密接な関係にあり、特に日常言語の創造性分析は近年多くの文体論者が注目している問題である。中でも、Carter(2011)による2種類の創造性の区分：Creativity 1(文学性重視：作品全体を通じての効果)とCreativity 2(言語使用重視：日常言語の「遊び」、対話で偶然起こる「ユーモア」等)は、本研究にも関係する。すなわち、語り手の用いる創造的な文体が散発的なものではなく、語り手の意図・語りのテーマにも関連しているかどうかは、その創造性の質を測定する上で、極めて重要と考えられる。

最後に、文体論と語りの研究(ナラトロジー)の関連である。‘Narrative Stylistics’(Simpson 2014)という言葉もあるように、ナラティブは文体論の重要な研究対象であり、特に非文学テキストの分析では、Labov(1972)が示した語りの構造モデルは、文体論にも大きな影響を与えている。本研究においても、Labovのモデルが、収集された語りに当てはまるかどうか注目して分析している。

3. 文体分析

今回分析の対象となった2人の語り手の基本情報は下記の通りである。

語り手	A	B	*「要介護度の目安」(http://www.iryonet.jp/rh/kaigohelp.html)、内田(2016)等を参照。
性別	女性	女性	
年齢	87	88	** MMSE(Mini Mental State Examination)は、30点満点で評価され、22-26点で軽度認知症、21点以下で認知症が疑われる。
*介護度	1	3	*** HDS-R(改訂長谷川式簡易知能評価スケール)は、30点満点で評価され、20点以下の場合認知症が疑われる。
**MMSE	28点	22点	
***HDS-R	26点	16点	

ライフレビュー介入は2015年10月22日、10月29日、11月5日の全3回それぞれ10分間ずつ行われたが、全般的特徴として語り手Aの方が語り手Bに比べて語りの量が著しく多かったことを指摘しておく。

文体分析では、(1)「聞き手との心理的距離感」、(2)「Evaluation(語りを面白く聞かせるための技法)」、そして(3)「人称代名詞」に焦点を当てた。まず(1)に関しては、語り手Aが聞き手(学生)を意識した表現(例：「若いもん」、「今の子」)を多用し、語り手との距離感を縮めようとしているのに対し、語り手Bは時折「です・ます調」の丁寧語を用いるなどして語り手と一定の距離を保とうとしている点を指摘した。(2)に関しては、両語り手が、否定語や繰り返し、直接語法といった技法を適宜用いて、語りをより面白く伝えようとしている点を指摘した。

最後に(3)に関しては、語り手Aが「私ら」という1人称複数形の代名詞を多用しているのに対し、語り手Bは常に「私」という1人称単数形を用いている点に着目し、その効果と意味を考察した。まず、語り手Aのナラティブには、「私(わたし)」という言葉が全部で40回使われているが、そのうちの18回(45%)までが、他者の存在を示す「ら」と結びつき「私(わたし)ら」として表現されている。これは、語り手Aが回想している物語世界の中で常に他者＝仲間と一緒にいることを暗示しているようである。さらに、語り手Aは「みんな」という表現を27回、「みな」を28回使用しており、こういった文体にも語り手Aの語りのテーマともいえる「他者との結びつき」が反映されているようである。仲間との一体感を暗示する「私ら」、「みんな」を用いた文体は下記の抜粋に典型的に見られた。

パッセージ【1】(八百屋で働いていた経験について)

(1) そうそうそう、な。(2) 忙しいしな、仕事やからな。(3) 今こそ大きなねえ、スーパーやあんなんやができておからなあ。(4) もう八百屋さんも〇〇(地名)で一軒だけなって、十何軒あったのに一軒なってしもたんやなあ。(5) 大型店舗にみな、ま、はは(笑)時代やねえ。(6) まあ、のほうもね、物がなかったやろ、戦後ね、それでまあ、おかげであの私ら若いもんがしたからな、わりにね、みなにかわいがってもうてね、なあ、はは(笑)

(7) まあその後は順調に、私のほう私、世間もね、だんだんとやっぱりね戦後、闇市とか、あの一、なあ、なんともひどいな、ありさまやったけど。みんなだんだんようになったよ、うそみたい。(8) 今考えたらなあ、今の子はほんま幸せ。(9) はは(笑) 今の人は幸せや思うわ。(10) 私らもう戦時中そのままずっとやからね、そやからほんまにあの、ただいつでもみなあの一、お米なんかないからなあ、百姓家さん手伝いに行きなさいゆうて、みな男の人がねえ、あの一みないてまうやろ、人手がないからゆうてみな、ほう、どないゆうんかなあ、勤労奉仕ゆうんかなあ、あんなんにみーんなかりだされてね、近いところでもみなあの一、田舎のほうにね、みな奉仕にいたりしよった。(11) それで、みな、おこ、ご飯をよばれたりしたらそれで満足。(語り手 A3 回目の語りより、下線、二重下線は筆者による。なお、(5) の「みな」は、人ではなく八百屋を指しており、「仲間との一体感」とは関連しない。)

一方、語り手 B のナラティブには、「私 (わたし)」という言葉が全部で 8 回使われている。ただし、「私 (わたし) ち」という言い方は 1 度もない。また語り手 A のナラティブに頻繁に登場する「みな」、「みんな」という言葉も、語り手 B ではそれぞれ 0 回、5 回となり、使用頻度が極めて低いことがわかる。語り手 B は 3 回のライフレビューを通じて、自身の「孤独」を強調しているが、その文体は語りのテーマと密接な関係があると推測できる。

4. おわりに

本発表では、介護老人保健施設に入所している 2 人の語り手によるナラティブを題材に、その内容および文体の特徴を分析した。認知症進行度および要介護度の点において若干の差がある 2 人のナラティブは、その内容・テーマおよび文体において対照的であり、語り手自身の心身の状況、語りのテーマ、そして文体には何らかの相関性がある可能性が示唆されたと考えられる。この事例研究により、医療・介護分野でのナラティブデータの収集とその分析の必要性が再確認されたとと言えるであろう。

「はじめに」で述べたとおり、本研究は挑戦的萌芽研究としてスタートしたが、「医療・心理・教育におけるナラティブ・データの分析手法の確立と文学研究への応用」(平成 28-30 年度 基盤研究 (C) 代表者 奥田恭士) として引き継がれることになり、文学テクストへの回帰も今後の課題となっている。本研究では「私」と「私たち」という人称代名詞の効果について論じたが、例えば拙論 Teranishi (2007) においては、アメリカユダヤ系作家でノーベル文学賞も受賞したソール・ベローの代表作『ハーツォグ』(1964) における“I”(私)と“we”(私たち)の効果について論じている。今後は、文学および非文学分野のナラティブを往復し、それぞれの分野のナラティブ分析と比較・考察が新たな課題の一つとなるであろう。

参考文献

- Butler, R. N. (1963) The life review: An interpretation of reminiscence in the aged. *Psychiatry* (26), 65-76.
- Carter, R. (2011) Epilogue – Creativity: Postscripts and prospects. In J. Swann, R. Pope and R. Carter (eds.) *Creativity in Language and Literature: The State of the Art*. Basingstoke: Palgrave Macmillan. 334-344.
- Labov, W. (1972) *Language in the Inner City: Studies in the Black English Vernacular*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- 扇澤史子、望月友香、山中崇、黒川由紀子 (2014) 「生活に活かす回想法自己効力感や自尊感情の観点から」、『精神科治療学』、29(8), 1023-1028.
- 斎藤兆史(2000) 『英語の作法』東京：東京大学出版会。
- Simpson, P. (2014) *Stylistics: A Resource Book for Students* (2nd Edition). London: Routledge.
- Teranishi, M. (2007) A stylistic analysis of Saul Bellow's *Herzog*: A mode of “postmodern polyphony”. *Language and Literature* (16), 20-36.
- 内田勇人(2016) 「介護老人保健施設入所高齢者に対するライフレビュー介入の試み」、奥田恭士編 『医療・心理・教育におけるナラティブ・データの汎用性の検証と分析手法の確立』、37-46.